安田女子大学紀要　49，97-106　2021.

小学校教員養成課程における外国語（英語）コアカリキュラム：安田女子大学における運用上の課題

平　本　哲　嗣

English Core Curriculum for Elementary School Teachers: Implementation and Limitations at Yasuda Women's University

Satoshi Hiramoto

児童教育学科，教育学部，
安田女子大学

要　旨

本論の目的は文部科学省が掲げる小学校教員養成課程における外国語（英語）コアカリキュラムについて、安田女子大学での展開について議論し、その運用上の課題について考察することである。本コアカリキュラムは教員養成、教員研修における一つの指針、また課程認定においては申請大学の提供する授業の適切性を評価するために用いられている。本論では先行研究を概観しつつ、安田女子大学教育学部児童教育学科学生に対する教育において本コアカリキュラムの実施状況を、全学的な教育課程という観点から考察する。具体的な手法としては、シラバスを参照しつつ、児童教育学科学生が一般的に履修する英語科目（課程認定を受けた科目に加え、全学共通教育科目としての英語）において、本コアカリキュラムに記述された力がどの科目において養成されることを想定しているのかを明らかにしつつ、その運用上の課題に論じることとする。

キーワード：小学校英語教育、コアカリキュラム、教員養成

1．はじめに

2017年に新しい小学校学習指導要領が告示され、２年間の移行措置期間をおいて、2020年度に中学年で「外国語活動」、高学年で教科としての「外国語」が全面実施された。また教育職員免許法の改正（2016年11月）および同法施行規則の改正（2017年11月）に伴い、2018年度は教職課程を有する大学は再課程認定を受けることとなった。この再課程認定においては「小学校教員養成課程における外国語（英語）コアカリキュラム」（以下、原則として「コアカリキュラム」）という枠組みが利用され、小学校教員養成課程における英語関連の授業内容について国家レベルにおけるある程度の統一性を担保することが求められた。筆者の本務校である安田女子大学教育学部児童教育学科においても2019年度入学生より適用される新カリキュラムにおいて、本コアカリキュラムに基づく運用が求められることとなった。

本論の目標はコアカリキュラムに示された理念が本学児童教育学科においてどのように具現化されているかを、提供されている授業のシラバスを参照しつつ、課程認定作業の対象外となっている共通教育科目も含めた上で議論することである。特に実際の授業展開における困難点や小学校英語教育における近年の動向を念頭に置きつつ、児童教育学科学生を対象にして今後どのようなカリキュラム展開が求められるか検討する。この目標を達成するため具体的には以下の研究課題を設定した。

研究課題：安田女子大学児童教育学科および全学における英語のカリキュラムとコアカリキュラムはどのように結びついているのか。またコアカリキュラムを安田女子大学において具体的に展開する際の課題は何か。

2. コアカリキュラムの概要

2016年８月19日、中央教育審議会の教育課程企画特別部会は「次期学習指導要領に向けたこれまでの審議のまとめ」を発表した。そして2017年11月17日に教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討会が「教職課程コアカリキュラム」を発表した。

外国語教育のコアカリキュラムは上記の「教職課程コアカリキュラム」とは異なり、2015年度に開始した「英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業」の一環として作成されている。この事業はこれ以前のさまざまな（英語）教育改革とも連続性のあるものであり、直近のものとしては中央教育審議会教員養成部会において2015年12月21日に発表された「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～（答申）」が直接的な根拠となっている。この答申において「小学校における英語の教科化への対応」が謳われ、「大学、教育委員会等が参画して養成・研修に必要なコアカリキュラム開発を行い、課程認定の際の審査や各大学による教職課程の改善・充実の取組に活用できるようにするとともに、小学校中学年の外国語活動導入と高学年の英語の教科化に向け、『小学校英語』に関する科目を教職課程に位置づけるための検討を進めるべきである」（文部科学省, 2017, p.42）との提言がなされた。この答申を受け、東京学芸大学による調査のもと、2016年３月31日、2017年３月20日に報告書が発表され、コアカリキュラムの内容（下図）が明らかになった（東京学芸大学, 2016, 2017）。

3. 外国語（英語）コアカリキュラムに関する先行研究

小学校英語教育のコアカリキュラムについての先行研究としては、①コアカリで記述された個別の内容の指導に関するもの、②教員養成や研修における利用に関するもの、③コアカリキュラムに対する学生や教員の認知度や評価を扱ったもの、に大別される．①の例としては田嶋（2019）、松井（2019）、佐藤（2019）、②の例としては、竹腰・内藤・萩原（2017）、井上・細井・森下（2017）、加藤（2018）、渡慶次（2019）、宮本・森谷・倉住・安藤・齊藤（2019）、③の例としては内野・酒井（2018）、酒井・内野（2018）、瀧沢（2019）、澁井（2019）、JACET関東支部特別研究プロジェクト（2019）、が挙げられる。

これらの先行研究の中で運用上の課題を論じたもののうち、比較的大規模な調査を行っている

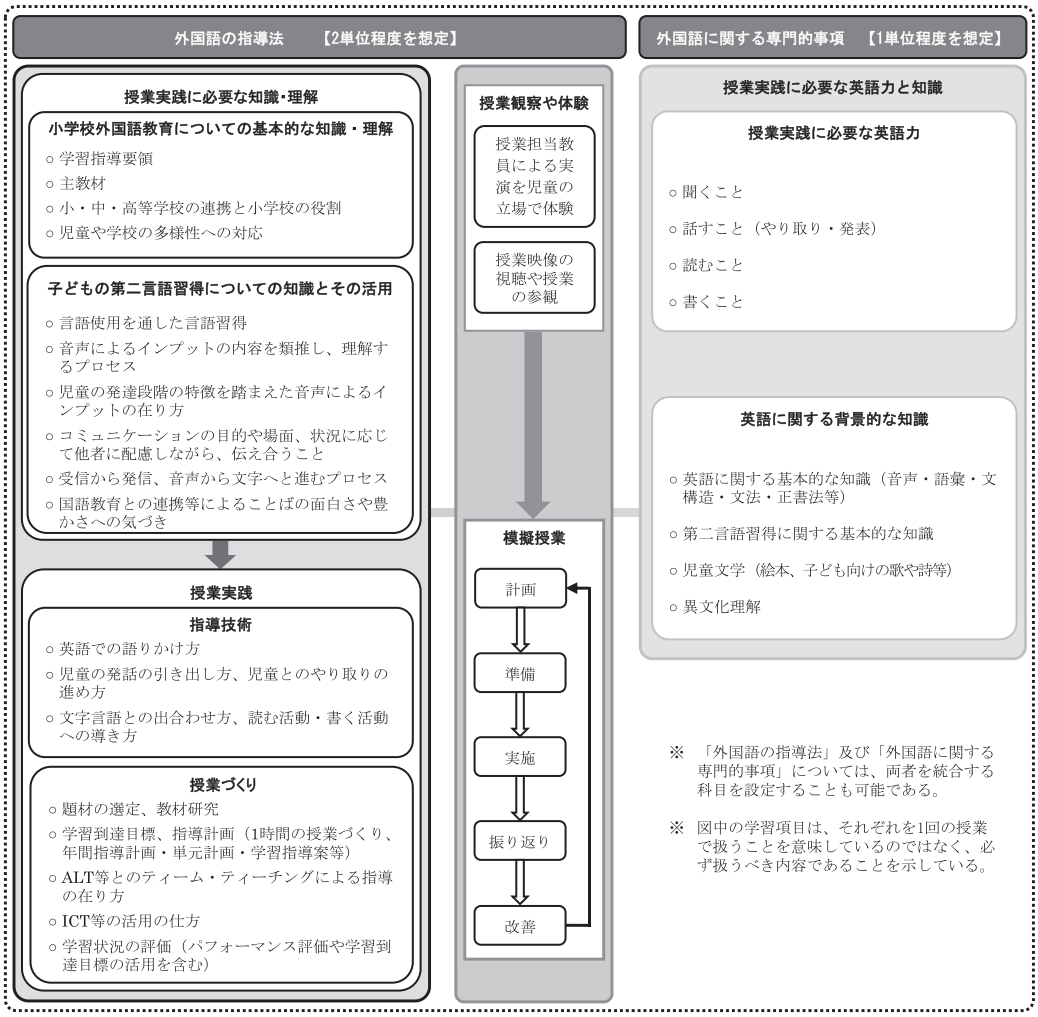

図. 小学校教員養成課程における外国語（英語）コアカリキュラム（東京学芸大学, 2017, pp.70-71）

ものとしてJACET関東支部特別研究プロジェクト（2019）が挙げられる。この調査では教員養成課程を有する大学の教職担当者によるコアカリキュラムの評価を考察している。調査の結果、特に小学校教員養成課程に関するものとして、コアカリキュラムの「外国語教授法」について以下の４点が問題・課題として示されたという。(p.93).

①教員数、授業時数、学生間の個人差など教育環境に関するもの（回答例「到達可能な学生と不可能な学生の格差が生じる」）
②カリキュラム上の問題点（回答例「全てをまんべんなく可能にするには指導時間が厳しい」）
③ティーム・ティーチングにおけるALTとの共同方法に関するもの（回答例「まだまだ効

果的なco-teachingに課題がみられる」）

④予算配備に関するもの（回答例「予算を減らされているので、もっと充実させていただきたい」）

また、「外国語に関する専門事項」に関しては、以下の３点が示されたという（pp.93-94）。

①授業観察や分析のための機会の必要性（回答例「実際の授業を見学するか、ビデオ録画で見ることが役立ちます」）

②授業運営に必要な英語力養成の困難さ（回答例「中高段階の英語力において不足する学生が大半のため、大学課程だけでは追いつかない」）

③授業実践に必要な学習内容を精選する必要性（回答例「小学校英語の授業や児童の学習への『関連性』と『必要度』を意識して、絞り込み、精選すべきである」）

これらの調査結果をまとめて、「外国語の指導」においては「授業実践に必要な知識・理解」は比較的到達しやすいと認識されているが、「授業実践」には困難を感じていること、また、「外国語に関する専門的事項」においては、「話すこと（やり取り・発表）」と「書くこと」に課題意識があることが指摘されている。

このような問題は安田女子大学の教員養成課程でも起こりうることであり、まずは現状の分析が必要であると考えられる。そこで次節では、安田女子大学における外国語カリキュラムを概観し、小学校教員養成課程の観点からその潜在的課題を考察する。

4.　安田女子大学における外国語カリキュラムとコアカリキュラムの関係

本節では安田女子大学における外国語教育カリキュラム、特に教育学部児童教育学科の学生における典型的な履修パターンから、学生はどのような知識・技能を学んでいるかをコアカリキュラムの観点から明らかにする。なお今回調査対象としたのは課程認定の対象となる科目に加え、全学生を対象に展開されている共通教育科目も含めることとし、具体的な指導内容についてはシラバスを参照することとした。

安田女子大学における一般的な外国語（英語）科目の履修パターン（2020年度入学生）としては次頁のような授業が提供されている。なお、※印のついている科目は児童教育学科の専門教育科目であり、再課程認定の審査を受けたものであり、したがってこれら４科目で指導する内容はコアカリキュラムに準拠したものとなっている。これら以外の科目は全学共通教育科目における英語科目である。

本論ではこれらの科目がコアカリキュラムに規定されたどの知識・技能と関連しているか調査することとする。なお、小学校英語のコアカリキュラムを分析参照枠とするために、本論ではコアカリキュラムで規定された構成要素にコードを付与することとした（表１参照）。

これらの分類カテゴリーに基づき、安田女子大学児童教育学科の学生が履修することが想定される典型的な科目群との関係をシラバス、および筆者が直接担当する授業（「初等英語Ⅰ」「初等英語Ⅱ」「英語科教育法」「英語科教育法演習」）については実際の指導内容や再課程認定時の提出資料を参照しつつ分析を行った（表３、表４）。指導がなされていると認定される内容につい

１年次 **「英語リーディングⅠ」（１単位）** **「英語リーディングⅡ」（１単位）** **「英語コミュニケーションⅠ」（１単位）** **「英語コミュニケーションⅡ」（１単位）** **２年次** **「英語ライティングⅠ」（１単位）** **「英語ライティングⅡ」（１単位）** **「英語コミュニケーションⅢ」（１単位）** **「英語コミュニケーションⅣ」（１単位）** **※「初等英語Ⅰ」（２単位）** **※「初等英語Ⅱ」（２単位）**	**３年次** **※「英語科教育法」（２単位）** **※「英語科教育法演習」（１単位）**

表１　コアカリキュラムにおける外国語の指導法【２単位程度を想定】

1. 授業実践に必要な知識・理解	(1) 小学校外国語教育についての基本的な知識・理解	a. 学習指導要領
		b. 主教材
		c. 小中高等学校の連携と小学校の役割
		d. 児童や学校の多様性への対応
	(2) 子どもの第二言語習得についての知識とその活用	a. 言語使用を通した言語習得
		b. 音声によるインプットの内容を類推し、理解するプロセス
		c. 児童の発達段階を踏まえた音声によるインプットの在り方
		d. コミュニケーションの目的や場面、状況に応じて他者に配慮しながら、伝え合うこと
		e. 受信から発信、音声から文字へと進むプロセス
		f. 国語教育との連携等によることばの面白さや豊かさへの気づき
2. 授業実践	(1) 指導技術	a. 英語での語りかけ方
		b. 児童の発話の引き出し方、児童とのやり取りの進め方
		c. 文字言語との出会わせ方、読む活動・書く活動への導き方
	(2) 授業づくり	a. 題材の選定、教材研究
		b. 学習到達目標、指導計画（１時間の授業づくり、年間指導計画・単元計画・学習指導案等）
		c. ALT 等とのティームティーチングによる指導の在り方
		d. ICT 等の活用の仕方
		e. 学習状況の評価（パフォーマンス評価や学習到達目標の活用を含む）

表２　コアカリキュラムにおける外国語に関する専門的事項【１単位程度を想定】

1. 授業実践に必要な英語力と知識	(1) 授業実践に必要な英語力	a. 聞くこと
		b. 話すこと（やり取り・発表）
		c. 読むこと
		d. 書くこと
	(2) 英語に関する背景的な知識	a. 書くこと
		b. 英語に関する基本的な知識（音声・語彙・文構造・文法・正書法等）
		c. 第二言語習得に関する基本的な知識
		d. 児童文学（絵本、子ども向けの歌や詩等）
		e. 異文化理解

ては丸印を付している。

5.　調査の結果と考察

調査の結果、以下の点が明らかになった。

①コアカリキュラムと本学の英語カリキュラムの対応状況を検討した結果、コアカリキュラムで規定された指導内容をカバーするだけの科目群が提供されている（当然のことながら児童教育学科の専門教育科目においてこれらの条件は当初より満たされている）。
②複数年度にまたがって科目が提供されており、指導内容のスパイラルな展開という観点からは、英語をくり返し学び定着をはかる機会は担保されている。
③コアカリキュラムで規定された内容を扱うだけの科目数は提供されているが、児童教育学科の学生が大学在籍中に「総体として」どの内容をどの程度の深さで学ぶかについては不明である。

小学校教員養成課程の場合、専門教育科目の展開において外国語は基本的には他教科と併存する形での授業開講となり、どうしても１教科あたりに配当される科目数や授業時数は中等教育の教員養成課程より少ないものとなる。その中でコアカリキュラムの内容を授業に反映しようとすると詰め込みすぎとなり、総花的、表面的な扱いになる可能性がある。例えば異文化理解についても、現状の限られた時間の中では、ステレオタイプ的な知識の伝授に終わってしまいかねない。世界には多様な言語、文化があり、それに対する感受性を強めることが外国語教育の目標のひとつであるにも関わらず、窮屈な時間編成の中、児童の先入観や偏見を生むだけの指導はぜひとも避けなければならない。そのためには異文化理解というトピックひとつをとっても十分な時間をかけられるようなカリキュラムの編成が重要となる。

コアカリキュラムにおいては異文化理解や児童文学、また外国語習得理論など、その扱う内容は多岐にわたる。この多様性に対応するためには各領域で高い専門性をもつ複数の教員によって学生の指導を行うことが望ましい。このことは他学科の教員とも協力しつつカリキュラムを展開することの必要性を示唆する。教員免許は本来該当学科内のカリキュラムをもって取得を保証すべきものであるが、コアカリキュラムの理想的な展開を考えれば今後は「全学的なコアカリキュラム観」に基づく外国語カリキュラムのデザインが求められよう。具体的には、課程認定という

表３　外国語の指導法【コアカリキュラムにおいては２単位程度を想定】と本学開講科目の対応

科目名			英語ＲⅠ	英語ＲⅡ	英語ＣⅠ	英語ＣⅡ	英語ＣⅢ	英語ＣⅣ	英語ＷⅠ	英語ＷⅡ	初等英語Ⅰ	初等英語Ⅱ	英語科教育法	英語科教育法演習
配当学年			１年前期	１年後期	１年前期	１年後期	２年前期	２年前期	２年前期	２年後期	２年前期	２年後期	３年前期	３年後期
			１単位	１単位	１単位	１単位	１単位	１単位	１単位	１単位	２単位	２単位	２単位	１単位
1	(1)	a									○	○	○	○
1	(1)	b									○	○	○	○
1	(1)	c											○	○
1	(1)	d											○	○
1	(2)	a											○	○
1	(2)	b											○	○
1	(2)	c											○	○
1	(2)	d											○	○
1	(2)	e									○	○	○	○
1	(2)	f											○	○
2	(1)	a									○	○	○	○
2	(1)	b									○	○	○	○
2	(1)	c									○	○	○	○
2	(2)	a											○	○
2	(2)	b											○	○
2	(2)	c											○	○
2	(2)	d									○	○	○	○
2	(2)	e											○	○

表４　外国語に関する専門的事項【コアカリキュラムにおいては１単位程度を想定】と本学開講科目の対応

科目名			英語ＲⅠ	英語ＲⅡ	英語ＣⅠ	英語ＣⅡ	英語ＣⅢ	英語ＣⅣ	英語ＷⅠ	英語ＷⅡ	初等英語Ⅰ	初等英語Ⅱ	英語科教育法	英語科教育法演習
配当学年			１年前期	１年後期	１年前期	１年後期	２年前期	２年前期	２年前期	２年後期	２年前期	２年後期	３年前期	３年後期
			１単位	１単位	１単位	１単位	１単位	１単位	１単位	１単位	２単位	２単位	２単位	１単位
1	(1)	a	○	○	○	○	○	○			○	○		
1	(1)	b			○	○	○	○			○	○		
1	(1)	c	○	○							○	○		
1	(1)	d							○	○	○	○		
1	(2)	a							○	○	○	○	○	○
1	(2)	b									○	○	○	
1	(2)	c									○	○	○	○
1	(2)	d									○	○	○	○
1	(2)	e									○	○	○	○

科目表記：
英語ＲⅠ：「英語リーディングⅠ」、英語ＲⅡ：「英語リーディングⅡ」
英語ＣⅠ：「英語コミュニケーションⅠ」、英語ＣⅡ：「英語コミュニケーションⅡ」、英語ＣⅢ：「英語コミュニケーションⅢ」、英語ＣⅣ：「英語コミュニケーションⅣ」
英語ＷⅠ：「英語ライティングⅠ」、英語ＷⅡ：「英語ライティングⅡ」

[1] 表３、表４においては再課程認定の対象となった科目は二重線より右側に配置している。

手続的な課題はさておき、教職学生に対する外国語教育の充実を図るために、全学的に展開される共通教育科目（外国語科目）、そして学科の専門教育科目間の有機的な連携が必要となる。これは担当者間で連携をとりつつ、充分な学習時間を確保し、学習内容の接続性を高めること、また必要に応じて同一教員で授業を担当するなどの対応が考えられるだろう。

江川（2017）ではコアカリキュラムの導入に伴い「教員養成等の質的向上を促す一方で、教育課程と教育内容の画一化を招き、国家方針を貫徹し易くするとの懸念もある。」（p.90）との指摘がなされている。コアカリキュラムの策定においては、大学教員や指導主事からの聞き取りという「ボトムアップ」の手続を経ており、国家による一方的な押しつけは当座はないだろうと思われる。無論、これからも実践者、研究者、行政が協同しつつ望ましい教員養成課程を構築しなければならないが、むしろ問題はコアカリキュラムで定められた枠組みが教員養成機関における諸処の連携不足から絵に描いた餅に終わる可能性がある点であろう。単に教職担当者だけでなく、英語や諸関連分野を担当する教員も教員養成課程における自らの授業の意義について理解を深めつつ、平素の指導に取り組むことが求められる。安田女子大学においては、今回の調査に基づき、今後学生や教員に対する詳細な質的調査を行うことで、小学校英語教育を担える教員養成という観点から、本学のカリキュラムがどう有効に機能しているかさらに考察する必要があろう。

引　用　文　献

1．文部科学省（2017).「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～（答申）」（https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieldfile/2016/01/13/1365896_01.pdf, 2020年9月10日閲覧）
2．東京学芸大学（2016).「文部科学省委託事業　英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究時魚平成27年度報告書」（http://www.u-gakugei.ac.jp/~estudy/report/index.html, 2020年9月10日閲覧）
3．東京学芸大学（2017).「文部科学省委託事業　英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業平成28年度報告書」（http://www.u-gakugei.ac.jp/~estudy/report/index.html, 2020年9月10日閲覧）
4．田嶋英治（2019).「小学校外国語活動・外国語のための授業開発と指導方法：コア・カリキュラムの「異文化理解」の教育に焦点を当てて」『高等教育開発センターフォーラム』7, 1-14.
5．松井千代（2019).「外国語（英語）コア・カリキュラムに基づいたNursery Rhymeの指導：免許法認定講習「英米文学」における講義から」『愛知淑徳大学教育学会』14, 43-50.
6．佐藤大介（2019).「小学校教員養成課程 外国語（英語）コアカリキュラムにおける『英語に関する背景的な知識』の学習（指導）項目に関する考察」『日本児童英語教育学会（JASTEC）研究紀要』38, 15-27.
7．竹腰佳誉子・内藤亮一・荻原　洋（2017).「小学校教科「外国語（英語）」のシラバス構成について：教員養成コア・カリキュラム（試案）の検討に基づく提案」『富山大学人間発達科学部紀要』11(3), 67-76.
9．井上　聡・細井　健・森下裕三（2017).「小学校教員養成のための外国語（英語）コア・カリキュラムの効果的運用」『教職教育研究』1, 1-8.
10. 加藤みゆき（2018).「小学校現場に即した小学校教員養成課程英語コア・カリキュラム指導事項」『岡崎女子大学・岡崎女子短期大学　地域協働研究』4, 11-18.
11. 渡慶次正則（2019).「小学校英語教育における教員研修と教員養成、指導力・英語力：小学校英語コア・カリキュラムを中心に」『名桜大学紀要』25, 75-83.
12. 宮本　弦・森谷浩士・倉住　修・安藤聖子・齊藤涼子「指導者養成プログラムの段階的開発に関する継続研究―コア・カリキュラム「小学校英語コース」具体化の試み」『日本児童英語教育学会（JASTEC）研究紀要』38, 111-127.
13. 内野駿介・酒井英樹（2018).「中・高等学校教員養成課程における学生のニーズ分析：中・高等学校教員養成課程外国語（英語）コア・カリキュラムの点から」『信州大学教育学部研究論集』12, 75-90.
14. 酒井英樹・内野駿介（2018).「小学校教員養成において必要とされる知識・能力に関する大学生の自己評

価—小学校教員養成課程外国語（英語）コア・カリキュラムの点から—」*JES Journal*, 18, 100-115.
15. 瀧沢広人（2019).「小学校外国語（英語）コアカリキュラム案に対する学生の意識調査」『岐阜大学教育学部研究報告　人文科学』67（2), 101-110.
16. 澁井とし子（2019).「小学校外国語（英語）の教員養成コア・カリキュラム—押さえておきたいポイント—」『マテシス・ウニウェルサリス』21(1), 129-151.
17. JACET関東支部特別研究プロジェクト（2019).「英語教育コアカリキュラムは教員養成課程でどのようにとらえられているか—JACET関東支部特別研究プロジェクト全国調査」『英語教育』68(8), 91-97. 大修館書店.
18. 江利川春雄（2017).「英語教育日誌 [2016年4月～ 2017年3月]」『英語教育』66(8), 84-90. 大修館書店.

〔2020.　9.　17　受理〕

コントリビューター：松岡　博信　教授（英語英米文学科）